

断罪聖女は悪魔と踊る

幻闇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ミリア・アークライトは聖女にして悪魔使いである。

世界各地を巡礼し、布教活動を続ける彼女の本来の仕事は、神を冒涜する異端者を狩
る事であった。これは、民に慈愛を注ぎ、その裏で冷酷な断罪者として生きる聖女と、そ
の使い魔であるお調子者悪魔テスターの、捻くれた恋の物語——かもしれない。
この小説は小説家になろうにも掲載しています。

断罪聖女は悪魔と踊る

目

次

断罪聖女は悪魔と踊る

——バギヤアツ！

金属で作られた重厚な扉が、外部からの強烈な圧力に屈してへし曲がりながら吹き飛ぶ。

獣脂を燃やすランプ独特の匂いに包まれた薄暗い地下室の床には、どす黒く変色した血液で描かれた冒流的な紋様と……胸を無惨に切り開かれた少女の死体。

「何者だ！」

そして、その周囲を囮むように立つ、黒ずくめの人影たちの姿があった。

「チツ」

破られた入り口からずかずかと踏み込み、舌打ちを一つ飛ばしてぎろりと人影たちを睨めつけたのは、美しい顔を憤怒に歪めた一人の女だった。

血生臭いこの場に相応しくない穢れなき純白のローブ。聖堂を模した形状の頭冠。激情に染まつた顔には、これもまた純白に染められた革製の眼帯が横一文字に両眼を覆っている。大陸に住まうものであれば間違えようもない。それは、唯一神ファルニアスに加護を受けし神の使徒、聖女の装いであつた。

「バカな……聖女だと？　何故この場所が?!」

「そんな事などどうでも良い！　悪魔召喚を急げ！　貴様らはヤツの足を止めよ！」

「ちくしょう、神の狗如きがっ！　死ねええつ！」

黒ずくめの、声からして男だろう一人が懐から取り出した短刀を腰だめに走り出す。眼の見えぬ女に防ぐすべなどあるはずも無い。床の哀れな死体と共に、邪惡な儀式の生贊と成り果ててしまうのだろう。それが聖女でなければ――。

——ボギュッ！

「あぼツ！」

深く引いた短刀を接近と同時に突き出した刹那、聖女は手足を弛緩させた自然体から、抜き打ちの如く右拳を振り抜く。カウンターをマトモに顔面に受けた男は、冗談のように首を180度グルリと回転させ、豚の様な悲鳴を上げて即座に絶命した。

一斉に息を呑んで恐怖に慄いた黒ずくめたち。ヒト一人を躊躇いなく死に至らしめた聖女は、彼等の前で首に片手を当ててコキコキと骨を鳴らすと、ランプの明かりに照らされて艶めかしくぬめり光る唇を開く。

「あー……ゴミどもには必要ない事だと個人的には強く思うが、これも唯一にして絶対の神たる使途の務めだ。これより審問を開始する。汝らは神に背く異端者であるか？　ああ、返事は結構。すでに裁定は下した。我が名はミリア・アークライト。唯一神

ファルreas様の代行者にして聖堂教会所属、神罰聖女第二席を賜る者。判決を述べる

――

「う……うわああああつ！」

淡々と機械のように口上を述べ始めた聖女――ミリアに対し、恐慌状態に陥った黒ずくめの男のうち三人が、ナイフや禍々しい装飾の施された曲剣を手に襲い掛けた。まるで、最後まで聞けば手遅れだと言わんばかりに。

「死刑！ 死刑！ 死刑！ 疾く死すべし異端者ゴミども。神敵悉く、我が拳にて慘滅せよ！」

唇を大きく歪ませあげて、聖女ミリアが無慈悲なる判決を下した。と同時に、もつとも近くまで接敵していた黒ずくめの異端者ゴミに向かつて右拳を固め、その腹部に神速の拳打を叩き込む。

「ゴボッ!! おげええええあ――がヒュツ」

くの字に肉体をへし曲げた男の、丁度手頃な位置まで下がった顔面を左拳のフックで殴り飛ばすミリア。頸椎を折られた男はそのままざるりと床に崩れ落ちた。

だが、すでに二人の男は得物を大きく振り上げている。即座に一人を迎撃したとしてもあと一人……。負傷は免れまい。誰もがそう思うであろう場面で、しかし聖女ミリアは慌てる事無く床を蹴りつけて神鳥の如く飛翔した。

地下室の天井まではおよそ五メートル。その距離を難なく飛び上がり、天井に両手を接触させてばねの様に全身を撓ませた聖女ミリア。次の瞬間、銃身から飛び出した弾丸の如き勢いで発射されたミリアのつま先が、曲剣を構えた男の頭部を蹴り碎く。

「あ……あ……化け物……」

「異端者(ゴミ)が使徒たる私を化け物呼ばわりとは笑える。だが許せん、死ね」

常軌を逸した聖女ミリアの闘法に、思わず襲い掛かる事も忘れて呻くもう一人の黒ずくめの男。聖女の怒りに触れた男の頭部に、野で花を摘むかの如き麗しい所作でミリアの掌が置かれた。

「ひつ！ ひあああああッ!! 許してつ！ 許して下さあ、あ、あ、あ、ぎあ、あ、あ、あ、あ、あ、ツ——」

メリメリと、白魚にも例えられる様な五つの指先が男の頭蓋に食い込んでいく。成人

男性の頭部を握り潰す握力とは……一体如何ほどのモノなのであろうか。
「何をしている貴様ら！ 早く奴を止めろ！ 我、深淵より汝を招かん。無垢なる乙女の魂を贊に、開け辺獄の門——」

地下室の最奥。ひと際高い場所に作られた禍々しい装飾の祭壇の前で、金糸の縁取りがなされた豪奢な黒ローブに身を包んだ男が他の黒ずくめたちに指示を出すやいなや、忌まわしき詠唱を唱え始める。

「やはり悪魔召喚の儀式か。飽きもせずよくもやるものだ。異端者^{ゴミ}の一つ覚えというやつだな」

「あがッ……ぎいっ……ヒヒ……ヒヒヒヒヒヒ」

頭蓋骨を突き破り、大脳にまで五指を食い込まされた男が呻き声の代わりに気狂いじみた笑い声をあげ始める。すでに痛みは無いのだろう。想像を絶する臨死の激痛に、男の脳髄は生きる事を諦め、死を誤魔化す為の快楽物質を分泌し続けていた。

「召喚者を含めて残り五人。面倒だ、さつさと殺すか」

「キヒヒヒ……キヒヒヒヒイツ!!」

そう告げると、聖女ミリアは空いた左手で男の肩を抑えつけ、頭蓋骨を掴んだ右手に力を籠めて引き上げ始める。

——ミシリ……ミチミチ……メリメリ……ぶちぶちぶちぶち。

首元の皮膚が音を立てて裂け始め、ついで筋肉が断裂する生々しい音が地下室に響き渡る。男の首が、東方に伝わる夜な夜な首を伸ばすというあやかしの様に引き伸ばされていく。

余りに現実を逸した狂気の光景に、足止めをしろと命じられた四人の男達は動く事も出来ずただ身体を震わせていた。襲い掛かればああなるのだ。例えこのあと確実な死が訪れるとしても、一秒でも長く生にしがみついていたいのは、生きとし生けるモノ共

通の願望だろう。

——ぶち……ぶちぶぢぶぢイ、ツ、!!

男の首が完全に引き抜かれた。黒々と長い……脊髄を伴つて。

尾骶骨に当たる部分を握りしめてブンツと一振り。ようやく己が死に氣付いた男の生首が、ぐるりと白目をむいて絶命した。そうして、狂気の武器を構えた眼帯の聖女が口許に酷薄な笑みを浮かべて男達に告げる。

「ふむ。今回は綺麗に抜けたな。知つて いるか？ 聖女の武器といえば、昔から鎖付き鉄球フライルと決まつて いるらしいぞ？」

臨界点を超えた恐怖に半ば狂つた四人の男達が、一斉に聖女ミリアに襲い掛かつた。

アルブレヒト・バーレスの人生は順風満帆だつた。あの日までは。

商家の下積みを地道にこなし、やがて貯まつた資金を元に自らの商会を神聖国に立ち上げた。下積み時代から支えてくれていた女性とも結婚し、息子と娘という二つの宝にも恵まれた。

軽い気持ちで した事だつた。金持ちであればだれでもしている事だ。家の外に愛人を囲うなどとい う事は。彼にとつて不幸だつたのは、成金だつたが故に作法を知らなかつた事だろ う。

不義の結果の子も含め、一生の面倒をみる覚悟が無ければ駄目なのだ。特に神聖国においては。アルブレヒトは共和国の出身だつた。

妊娠したという愛人に、男は手切れ金を渡して別れを告げた。とても一生を暮らしていくには足りない額のそれに、愛人は教会へと訴えを起こした。あるいはそこで、考えを改めていれば良かつたのかもしない。

大幅に額を上乗せするか、今までの様に養うか、どちらも厭うた彼は、こつそりと愛人の飲み物に薬を混ぜ……自らの血を分けたはずの腹の子を流させた。そして、それが明るみに出た日、彼は聖堂教会に捕縛されたのだ。

共和国と違い、神聖国において墮胎の強要は重犯罪である。辛うじて、蓄えた財産の半分を賠償金にあてたお陰で刑罰は免れたものの、長年連れ添つた妻にも見捨てられて残りの財産全てを慰謝料とした結果、彼は全てを失つた。

彼は神聖国を憎んだ。己の全てを奪い去つた神を憎んだ。そして己を追い込んだ女という存在を憎んだ。

そうして憎悪に心を焦がした男の夢に、悪魔が現れた。

アルブレヒト・バーレスの第二の人生は順風満帆だつた。あの日までは。

夢の悪魔の言葉に従い、己と同じ様に神を憎む男達と出会い、組織を作つた。

神聖国の中に拠点を幾つも用意し、邪悪な儀式場として作り上げた。

女を攫い、惨たらしく殺して生贊とし、悪魔を召喚した。召喚された悪魔は地に混乱を呼ぶために解き放たれた。

彼らの目的は悪魔を使役する事ではない。世に解き放ち、神の恩寵を信じる人間たちの世を破壊するためであつた。

召喚を終え、用済みとなつた女の死体を同志たちと共に犯し、汚し、魂のみならず肉体すらも凌辱し尽くす。

魔宴の痕跡が残らぬ様すべてを土に埋め、彼らは新たな獲物を求めて神聖国を転々と巡つた。

そうして欲望に取り憑かれた男達の前に、死神が現れた。

「あとは貴様だけだと異端者ゴミ。お得意の悪魔召喚はまだ終わらないのか?」

生首付きのフレイルは一人目の頭を碎くと同時に碎けて壊れた。残りの三人を順繰りに素手でなぶり殺し、だというのに返り血の一滴すらも浴びていない美しき純白の衣装のまま……聖女ミリアがアルブレヒトに告げた。

「——天より墮とされし穢れし者ども、七つの罪を背負いて君臨せし魔王よ、我が渴望を聞け——」

アルブレヒトは詠唱を続けながらも困惑していた。もはや詠唱を止める事は出来ない。半ば繋がりかけた異界との交信中にこれを放棄すれば、術式の反動をまともに受けた己が魂は輪廻すら許されずに滅びるだろう。だというのに、目の前の聖女は愉悦の笑みを浮かべながらこちらを見ているだけだったのだ。

「いでよ！ 神を嘲笑する悪の冒流者！」

サモン・デーモン
悪魔召喚！

いくら神の加護を受けた聖女と言えど、召喚された悪魔そのものに抗する術などある筈がない。なにを考えているのかは不明だが、もはや詠唱は完了した。アルブレヒトは己が勝利を確信し、目の前の聖女が召喚された悪魔に蹂躪される光景を心待ちにしていた。だが、赤光を放つて悪魔を呼び出す筈の血の魔法陣にはいくら待てども変化はなかつた。

「——それで？ つまらない芸だつたな。この後はもつと面白い芸を披露してくれるのか？」

「バカな！ なぜ悪魔が出てこない?!」

「クハハハ！ とんだ道化ぶりだな。なるほどそれも含めての芸だつたか！ クハハハハ……あーあ、つまらん」

アルブレヒトの狼狽ぶりを眺めて笑っていた聖女ミリアが突如真顔に戻ると、奇妙な行動に出た。魔法陣の中心に転がっていた少女の死体につかつかと歩み寄り、なんと蹴

り飛ばしたのだ。無辜の被害者に対するあまりに無体な行動に、さしものアルブレヒトも目を剥いて驚愕する。

「きさま……本当に聖女か？ 罪なき少女の死体にその様な仕打ちをするなど……」「鏡を見て言え異端者。^{ヨミ}おいクソ虫、さつさと起きろ。ゴミ箱としての役目を果たせ」

恐るべき変化が起きた。

聖女ミリアが死体に語り掛けるや否や、胸部を無惨に切り開かれた死体が闇色の靄に包まれたのだ。地下室全体の温度が急激に下がっていく。体感などではない。魔なる存在の顯現に、空気中に含まれる分子すらも恐怖して停止した結果である。

闇の靄が晴れた時、そこに立っていたのは無邪気な笑みを浮かべた金髪の少年——いや、悪魔だった。

「相変わらずミリアは悪魔使いが荒いよね。ボクじやなかつたら叛逆を企てているところだよ」

「虫が喋るな。黙つて仕事をしろ」

「ぴやーこわい！ ボク知ってるよ、これツンデレってやつだよね。それじやあ——頂きます」

アルブレヒトは絶望の中で理解した。

生贊に選んだ無垢なる乙女は、本当は悪魔だったのだ。悪魔を贊に悪魔を召喚できる

筈もない。だが何故、聖女が仇敵である悪魔を？ アルブレヒトは疑問を抱いたまま、その答えを得る事無く頭部を大きく肥大化させた悪魔に喰われてその生涯を終えた。

「残つた異端者ヨウドウガの魂も残さず喰らえ。やつらに輪廻を許すな」

「はいはい。でもさあ、いつつも醜い魂ばっかりじや胃もたれしちゃうよ。たまには無垢な魂を食べたいなあ……例えばミリアの魂とか、きっとほつぺたがおつこちるほど美味しいんだろうね」

「クソ虫には穢アシキれた魂が似合いだろう。それに私の魂は主に捧げている」

「それは死んでからの話でしょ？ ねえねえ……ちょっとつまみ食いさせてよ。一口だけ！ ねえお願オノマツい」

絶対零度に凍り付いた、見えざる聖女の視線が悪魔を射抜く。だが、聖女の聖別された白銀のガントレットが唸りを上げる事はなかつた。どれほど言葉を重ねようとも、使い魔である悪魔が自分に逆らう事は無いとわかつていたからだ。

「駄目だ。早くクソを喰らえ。私はもう帰る」

「ちえつ、つれないなあ……。まあいいや、ボクもこんな所なんかより早くミリアとの愛の巣に帰りたいもの」

「勝手にしろ」

かつて聖堂教会で、このような議論がなされた事がある。

物質界に受肉した悪魔は、たとえこれを討滅したとしても魂が地獄へと還るだけだ。やつらは何度でも異端者によつて召喚されてしまう。であるならば、悪魔の魂を拘束して消滅するまで使い潰すべきではないか？ 神敵である悪魔を捕らえ、神聖術式にて何重もの強制契約^{ギアス}にて魂魄を縛り付ける。理論の上では可能なそれを、聖堂教会は何千もの悪魔の魂を贊にしてようやく成功させたのだ。

地下室を出て地上へと戻つたミリア。漂つていた異端者たちの魂を慌てて喰らい、あとを追つてくる金髪の悪魔の足音を聞きながら、彼女はハア……と一息、溜息について心の中で誰にも言えぬ感想を呟いた。

私の悪魔、相変わらずウザ可愛い——と。

※

聖堂教会に認定された、教会所属の聖女たちの数は常に十人と定められている。いわゆる聖十姉妹^{テン・シスター}と呼ばれる彼女らの仕事は、教会の広告塔や各施設の慰問、各地への布教など多岐にわたる。

教会の総本山がある聖都レアス・カナンに居を構える聖女たちであるが、彼女達が自宅で過ごす事は余り無い。広大な大陸全体を常に飛び回つて布教や地方教会への巡礼

をおこなつてゐるからだ。表向きは。

教皇を含むごく一部の上層部と聖女本人たちのみが知る、裏の仕事を疑われる事無く行うための隠れ蓑に過ぎないので。裏の仕事とはつまり、異端者狩りである。

そんな、数少ない仕事明けの休暇をゆつたりと、聖女第二席であるミリア・アークライトは自宅で楽しんでいた。

「ふむ。昼間から呑むワインはたまらん。貴様もそう思うだろう? クソ虫」

「その姿を信者たちがみたら幻滅するだろうね。でもボク的には良い感じに堕落みがあつていいかな? もつと頽廃的におつまみのチーズと全裸の美少年なんてどう?」

「チーズは貰おう。全裸の美少年はいらん。天然モノならともかく、どうせ貴様だろうが」

「天然モノなら良いんだ……」

純白のローブと頭冠ではなく、下着の上からインナーシャツを着ただけというあられもない恰好でソファラーにどかりと座つてワイングラスを傾けているミリア。両眼を覆う眼帯も純白ではなく、無骨な黒革で作られた普段遣いのものだ。

聖女は皆、肉体の器官を一つだけ神に捧げて恩寵を得ている。ミリアであれば両の眼だ。とはいえ、代わりに得られた人の域を大きく超えた超感覚によつて視覚に頼る必要はまったく無い。聖女ミリアには見えている。神より与えられた視座にて、全てが。

「でもさあ……。せつかくの休みだよ？ 買い物とかいいの？」

「必要ない。欲しいものは全て注文すれば勝手に届く。わざわざ出かける必要が何処にある？」

「ほら……お日様の下で気分転換とか？ あんまり閉じこもつてると陰キヤ聖女になっちゃうよ？」

「悪魔が太陽の下で気分転換をしろだと？ それはもしかして高度なジョークか？ あと私は陰キヤにはならん」

「ミリアって外面だけはいいもんね。表ではあらあらうふふつて感じで、吹き出しそうになるのを我慢するの大変なんだけど？」

「殺すぞクソ虫」

部屋の空気が一瞬で凍りつく程の殺氣がミリアから発され、半裸の美少年に叩きつけられる。叩きつけられただけだ。悪魔はただ、平然と笑みを浮かべていた。

「あーこわい。こわいからもう部屋で寝ちゃおうかな。外にもいかないみたいだし」「待てクソ虫」

くるりとミリアに背を向けて、悪魔が部屋から退出しようとしたタイミングでミリアが声を掛けた。

「一杯くらいつきあえ。ペットは飼い主の無聊を慰めるものだ」

ミリアに背を向けたままの悪魔の顔が、歪んだ笑みを形作り——即座に無邪気な笑みに戻る。くるりと踵を返して主人に向かいに、悪魔は腰をおろした。

「仕方ないなあ……。というか家の中では名前で呼んでよ。ちゃんとテスターってさ」「うるさい、貴様はクソ虫で十分だ。注げ」

ガラス製のローテーブルに置かれたワインを自分のグラスに注ぎ、ついで主のグラスにも注いでやりながら悪魔——もといテスターはおかしそうに笑う。

「あはは！ ベッドの中では呼んでくれるくせに、でもミリアのそういうツンツンしたところ好きだよ」

「誰がいつクソ虫と褥を共にしただと？ 私はいまだ純潔だクソ虫が！ お仕置きが必要のようだな……」

さしものミリアといえど、この発言は看過できなかつたようだ。眼帯の下に隠された瞳をギリリと釣り上げて、彼女は豊かな胸の谷間に右手を差し入れ……白銀に輝くロザリオを取り出した。

「冗談だつて冗談……つてちよつとまつて、それはダメだつて——ピギヤアアアアア！」

悪魔を使役する神罰聖女としての標準装備である魂縛調伏端末だ。法力を籠めた強さによつてギアスの強度を劇的に高めれば、並の人間であれば一瞬で発狂して死に至る程の激痛を悪魔に与える事が可能なそれで、迂闊な発言をしたテスターを痛めつけていく

ミリア。その眼帯で覆われた顔には確かに、反抗できぬ者を嬲る愉悦の笑みが浮かんでいた。

「クソ虫の悲鳴はいつ聞いても面白い。一日に一度は聞かなければな」

「はあ……はあ……うちの御主人様がドエス過ぎる件について……まったく、悪魔虐待罪で逮捕されてよ」

「残念だつたな。悪魔に人権は無い」

「人間はこれだからさあ！　きいーつ！　許せない！」

その後は迂闊な発言をしなくなつたところを見ると、お仕置きの効果はそれなりにあるようだ。とはいえこの程度のやりとりは一人にとつては日常茶飯事であつた。

「どころでさあ……もぐもぐ……ミリアつて好きな男とか……もぐもぐ……いなの？　別に聖女でも結婚しちゃいけない事は無いんでしょ？」

「話すか食うかどつちかにしろクソ虫。私は恋などしない。私が愛するのは唯一神ファルレアス様のみだ」

チーズを頬張つて咀嚼しつつ、ミリアの答えを聞いたテスタは沈痛な面持ち——などをする訳も無く、ゴクリと嚥下を終えてから笑い始めた。

「アダマンタイトも真っ青のお堅さだね。ボクとしては恋に狂つてくれたほうが堕落させやすいから助かるんだけどなあ」

「そもそも私から恋を奪つたのが——いやなんでもない。私としたことが喋りすぎたな。やはり紛い物の美少年ではいくら見た目が良からうとダメだ。もう部屋に戻つていいぞクソ虫」

「なになに？ 気になるじやん。あれかな？ 恋人を殺されたとかかな？ でもミリアって聖女になつたの子供のころだよね？ 片思いの相手とかかな？」

「もう一度喰らいたいらしいな……」

「あ、ボク読みたい本があつたんだつた！ 部屋に戻るね！」

再び胸の谷間に右手を差し入れたミリアを見て、脱兎のごとくリビングから出て行つたテスタ。流石にあの激痛を続けて味わうのは厳しいようだ。

「ふん、私とて人並みに恋をした事もあつたさ。だが、もうあの人にはいないし、私もある頃のようには戻れない」

部屋の中に一人、ソファに座つたまま自嘲するかの様に呟いて、ワイングラスを呷るミリア。

かつて心を焦がした悪魔たちに対する憎悪はもはや薄れてい。自分が使役する使い魔を内心で可愛らしいと思えるほどには。むしろ今の彼女は、悪魔よりも彼等を使つて悪事を為そうとする人間たちの方が嫌いだつた。

悪魔は単にそういう生き物だ。人を騙し、殺し、堕落させて嘲笑う。ただそれだけの

哀れな生き物だ。だが、彼等を使う人間たちは醜く、悍ましかつた。同じ生き物である筈なのに、弱者を虐げて支配する有り様は吐き気がする。そしてそれは、ミリアの自分の想いと同じだつた。

「度し難いのは私たちの方か。まつたく、ファルreas様の創り給うた存在とはおもえんな……と、これは聖女としてあるまじき失言か。クハハ……はあ、つまらん」手酌でグラスにワインを注ぎ、再び呷る。神の加護を受けた聖女の肉体は即座にアルコールを分解してしまう為に、何杯干すとも彼女が酔う事は無い。だがそれでもその晩、ミリアの手が止まる事は無かつた。

※

なんて事は無い任務の筈だつた。

規模の大きな異端者の組織を完全に潰す為に、異端者が潜伏しているとおぼしき地方都市に先行して偵察を行つていた神罰聖女第七席次と合流し、二人掛かりで一人残らず皆殺しにする。

聖女ミリアにとつて誤算だつたのはただ一つだけ。先行していた第七席の聖女であるノエル・グシオンが、すでに墮落していた事だ。

——ギャリイツ!!

白銀に輝くガントレットと、闇色に昏く輝く刀が火花を散らしてぶつかりあう。

燃え盛る聖堂教会の礼拝堂。

本来であれば、司祭が神の言葉を伝える神聖な場所で――二人の聖女が凄絶に殺し合っていた。

「あはははっ！　てめえは前から気にいらなかつたんだよオ！　陰陥めくらアツ！　死ねツ！」

純白であつたはずの装束を漆黒に染め、下腹部に何重にも革製のベルトを巻きつけたノエルが罵声を浴びせかけながらミリアに斬り掛かる。

ノエルの得物は刃渡り五尺（およそ150cm）を超える冗談の様な長さの長刀だ。その長さに見合つた厚重ねの刀身は、素材である神鋼の密度も加味すれば総重量50キロは下らぬ代物である。それをまるで藁の様に振り回しているのだ。軽々とガントレットで重い斬撃を弾いているミリアも含めて、聖女とはまさに人を超えた神に近しい存在であつた。いや、墮落したノエルにとつては地獄に君臨する魔王に近しいと表現するべきか。

「ノエル！　何故貴女が！　あんなにも優しく、神への信仰篤き貴女が何故！　墮落したのですか！　誰に惑わされたのです？！　それとも異端者どもに囚われ……無体な拷問と凌辱の末に魔が差したのですか？！」

白銀の籠手で重く鋭い太刀を弾き、受け流し、正面から殴りつける。

堕落した聖女であるノエルの一撃は素早く——そしてひどく重かつた。

「ずっと狙つてたんだ。異端者を喰らう事しかできないザコ悪魔と組んで、俺らの中でもトップクラスの討滅数を誇る聖女ミリア。貴様が居なければ、俺はもつと上にいけるのに。もつと上へ……神に近い場所へ。だがその傍らにはいつもめえがいた。許せねえよなア……神の傍に在るべきなのはこのボク何だから!!」

がなり立てる様な言葉の勢いと共に、腰だめに構えた長刀を増幅法術にて強化された超人的な身体能力のままに一閃。ただ一振りしかしていいにも関わらず、ミリアに対し三条の刃が襲い掛かる。

「ぐうっ!!」

——ギヤリギリイツズシャツ!!

二つの刃を両拳にて凌ぎ、それでも防ぎきれなかつた一条の刃がミリアの顔面を僅かに外して振り斬られる。

——ぱさつ……。

断ち切られた純白の眼帯が地に落ち、焦点の合わぬ白濁した瞳が白日に晒された。

「気持ちワリイ目ん玉しやがつて……さつさと死ね！ 死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

えええええええつ!!!」

「もう戻れないのね。そう……いいでしよう。神罰聖女第七席次、ノエル・グシオン。汝を今より神敵と認定する。もはやは是非は無い……せめてもの慈悲として、苦しませずに殺してやろう。裏切り者の大淫婦!!」

「うるせえええええっ!! 刀の鎌になれやめくらボケエ!!」

狂乱した戦士の如き狂気に歪んだ表情で、ミリアに斬り掛かっていくノエル。その太刀筋はもはや常人には視認する事も不可能な、超速の極致にあつた。反応すら出来ずに入身を膾に斬り刻まれて死ぬミリアの姿が、周囲で見守る使い魔の悪魔たちの脳に幻視される。だが――

――ガキイン!!

「なっ！ バカなア!!」

法力を纏わせた左手にて、ガツチリと迫る刀身を掴み取ったミリア。その掌からは、食い込み続ける刃によつて滝の様に鮮血が溢れ出していく。しかしそれだけだ。肉に食い込んだ刀身は、満身の力を籠めた筋肉にて食い止められていた。

ノエルの表情に、初めて焦りの色が生まれた。しかし、もう手遅れである。

「教会式格闘術奥義――碎魔絶神掌!!」

純白を遥かに超える、真なる光そのものがミリアの右拳から溢れ出る。つかみ取られた刀を捨てさり、即座に離脱しようとしたノエルにほぼ等速の跳躍で追いついたミリア

が、血塗れの左手でノエルの肩口を掴んで肉体を固定し——光輝の塊と化した右拳を、指先を揃えた掌の形に変えて腹部に軽く、ぽんと触れた。

——ズンツ!!

「おー」つ……ゴボッ……「）ぶつ…………」

軽く触れただけにしか見えぬ接触がもたらした結果は凄惨の一言に尽きた。

立つたまま白目をむき、腹腔内を荒れ狂つた衝撃波の圧力によつて口から止め処なく、鮮血と内臓の破片らしき肉片を大量に吐瀉していくノエル。その内臓は既に心臓や肺も含めて粉々に砕けていたのである。

「む……。妙な感触が……子宮……なのか？　ノエルに？」

——パチパチパチ。

冗談の様な笑顔で、拍手を打ち鳴らしながらノエルの近くに寄つてきたのは彼女の使い魔であつた。あどけない少女の姿をしたその悪魔は、墮落したとはいえ同僚を殺してしまつたと、内心で動搖していたミリアに告げる。

「さすが第二席の聖女様は違うわね。うちの聖女とは大違ひだわ」

「貴様は封印施設に戻つて貰うぞ。ノエルの悪魔」

「はあ？　そんなもの願い下げよ。せつかくノエルちゃんが墮落して、しかもこんな死に掛けになつちやつたんだから……はい、ピタツと」

「貴様……一体何を！」

少女悪魔が、瀕死で棒立ちしているノエルに抱きつく。すると闇色のもやが二人の肉体を包み込み始めた。

今すぐバラバラに吹き飛ばすべきか。だが、あの闇色の靄は厄介だ。テスタの時もそうだが、あの靈質はひどく法力と相性が悪いのだ。そう考えたミリアは、己が相棒を傍に呼びつけてしばしの間様子を見る事にした。いつでも拳を抜き打ちにできる自然体を維持したままに。

「アレはなんだ？　何が起きているかわかるか？」

「多分だけど、依り代にしようとしてるんじゃない？　本来なら聖女の肉体なんて危なすぎて憑依できないんだけど……堕落した今なら——あつ、出てくるよ」

闇の靄が晴れていく。

そこから現れたのは、魔に魅入られて墮落した聖女、ノエル・グシオン……では無かつた。

確かにその顔にはノエルの面影が残っている。だが、その頭部からは捩子くれた禍々しい角が左右から伸びて天を突き、背中には漆黒の被膜を持つた蝙蝠の如き翼が生えている。そして、くるりと悩まし気にこちらに向けた尻には、先端がフオーラの様に割れた闇色の尻尾。

完全なる悪魔……否、魔人と化したノエルの姿がそこにはあつた。

「ンはア……やつぱり墮落した聖女の肉体は格別ね。魔力が無限にあふれてくるわ」「貴様、ノエルではないな？ 先ほどの悪魔か！」

「そうよ？ 貴女は知ってるわよね、この娘が神に捧げたモノを……」

「子宮だろう。かつてのトラウマから、彼女はソレを捧げる事を選んだと聞いた」

「可哀想な娘だつたのよ？」 でもね、失つたモノが大事であればあるほど、取り返したくなるものなの。たとえ神が相手でもね。彼女は恋をした。そして愛する男の子を産む為の子宮を願つた。あとはわたくしがちよちよいと……で墮落した聖女が出来上がりつてわけ。墮落すれば失われた器官は戻つてくるからね」

「ならその男と一緒にどこまでも逃げればいいだろう。何故私を襲つた？」

ミリアの言い分ももつともである。逃亡先で捕まる可能性はあつたが、少なくとも正面から上位席次の聖女に挑むのは無謀に過ぎる。そして普段と違う妙に荒れた口調。どうでも良い理由で襲い掛かってきた事そのものもおかしい。

「いや、先ほどのアレは貴様だな？ 大方この状態になる為に、ノエルを唆して墮落させ、その際に脳髄に己が一部を寄生させて操つたのだろう」

「やっぱアンタ嫌いだわ。めくらの癖に察しが良すぎるつてんだよ。どのみちこのカラダを得たなら目的は果たせたもの、ついでに試運転も兼ねて貴様らを血祭りにあげてや

ろう！」

魔人ノエルが咆哮の様に告げた瞬間、全身から莫大な魔力がオーラとなつて吹き上がつた。可視化できる程に圧力と密度を高めた魔闘気はそれでも、体内で練り上げられる力の万分の一の余波にしか過ぎない。

「また地が出てるぞ。所詮クソ虫はクソ虫か……。テスタ、私の装備に憑依しろ。コイツは本気を出さねば勝てん」

「はいはい、まさか魔人化するとはね。油断しないでよ、魔魂憑依形態^{デモノエンチャント}は確かに強力だけど、法力との相性は悪くて10分程度しか持たないんだから」

ミリアの両手両脚に装備された、聖別された白銀の手甲と足甲。それに闇色の靄が纏わりつくと、白銀の輝きは歪みねじれ……紫煙のごときオーラを纏う。そして、聖女ミリアは神に祈る清浄な心のままに、闘争の雄叫びと奇跡の祈りを発した。

「ファルレアアアアアツス!! ゴ照覧あれい!! 我が唯一の神!! 汝の恩寵を給う……我、聖なる戦に挑みし使徒にして、神敵悉く滅ぼす者なり！」

【聖戦】

聖女が行使する幾つかの奇跡。その中でももつとも強力な奇跡が【聖戦】である。

効果そのものは単純だ。対象者の肉体と装備品の能力は大幅に強化し、心から恐怖とう感情を失わせるだけだ。もつとも最後の効果が極めて危険なのだが。

そして、範囲をある程度操作する事が可能なこの奇跡は、大人数を祝福すればするほ

どに効果が下がっていく。逆に言えば、今回の様に一人だけに掛けた場合、その増幅率はおよそ10倍を超えるだろう。

——ドゴオツ！

聖女の肉体がブレて搔き消えたかの様に見えた瞬間、その右の拳が魔人ノエルの右頬に突き刺さっていた。

元々の肉体性能がすでに人外の領域にあるミリアが、【聖戦】の加護を受けたのだ。その強さはもはや、地上最強といつても過言では無い。

——ボゴオツ！ ドガアツ！ ズドオオオン！！

神鳥の如く飛翔し、組み合わせた両手で叩きつける様に頭部を打ち据える。着地の瞬間に合わせて両の掌を揃え、奥義である碎魔絶神掌を両手で放つ。

その場で素早く回転して全体重を乗せ、力を十分に乗せた足刀で蹴り穿つ。

先ほど戦った墮落した聖女であれば、100回は即死してもおかしくはない程の激烈な破壊の力が荒れ狂つた。だが――。

「あたた、流石に痛いわね。特にあの掌でやるやつね。内臓二個くらい破裂したわよ？ もう治つたけど」

無傷……とまではいかない様であつたが、どうやら喋り終える頃には回復しきつてしまつた様子だ。正に魔人の名に相応しい化け物ぶりであつた。

「ふん。いい加減弱者を斬るのにも飽きていたところだ。今度はそちらから来い。相手をしてやろう」

「あら強がりさんね。でもいいわ。その綺麗な顔が絶望と苦痛に歪むのを見せて頂戴」

——ヒュパッ！

雷鳴もかくやという超高速で魔人ノエルがミリアに接敵し、納刀していた長刀を神速で抜き討つ。まるで次元そのものを切斷したかの様にミリアの周囲に10を超える数の斬線が刻まれた。

——キュガガガガガガガガガツッ！！

そのすべてを四肢に装備した武器で弾き、流していくミリア。見えぬ聖女には見えていた。すべての死の線が。

実力は完全に拮抗していた。であれば肉を斬らせて骨を断つ他なし。それぞれに無傷の勝利を諦めた二人が、より一步踏み込んだ殺し合いにのめり込んでいく。

常人には知覚すら出来ぬ超高速の世界で、残像とソニックブームの舞い散る、生と死の極限まで近づいた空間で、二人は幾度となくぶつかり合い、鮮血と闘志を迸らせながら殺し合い続けていた。

——魔人ノエルの長刀がミリアの肩口を貫いて右腕を斬り飛ばす。即座に左手で斬られた右腕を掴み切断面に押し付けるミリア。自動再生法術リジエネレイトの効果により、コンマ一秒

で右腕が完全に接着された。

——ミリアがアギトの如く組み合わせた両拳から、極限まで圧縮した法力を収束して撃ち出し、魔人ノエルの翼を丸く大きく抉り取る。次の瞬間には闇色の靄に包まれ、晴れた時には治っている。

——誘う様に長刀を誘導し、己が腹部に根元付近まで刀身を埋め込ませたミリア。そのまま股間まで斬り下げようとした刀身そのものを腹筋の収縮で抑え込み、胸部目掛け貫手を放つて心臓を抉り出すミリア。

——表情を激痛に歪めつつも、魔人ノエルは心臓を抉り取られたまま更に力を籠めて、ミリアの腹から股間までを斬り下ろした。夥しい血を噴き出させながら距離を取った両者。どちらにも追い打ちをかける余裕などない。

「ぐぶつ……げぼおおおつ……心臓の再生にはさすがに時間がかかるわね……」

「おげえ、え、え、つ……内臓が零れ……ヒーリング……リフレッシュゲボツ……カヒュツ……。だめ、間に合わない。神の御手にて癒したものう——【完全治癒】」

例え瀕死に至ろうとも、それぞれの回復力はまさに化け物のそれだ。とはいっても、大きく損壊した肉体の再生には、それに見合う魔力や法力が必要となる。ここにきて、ミリアの不利は明らかだつた。

「あなた辛そうねえ……その力、地獄に君臨する七大魔王とも渡り合えそうだけど、長

くは持たないんじやない？ 段々あなたの悪魔が剥がれかかっているわよ？」

「ぐううつ……その前にクソ虫……貴様を殺せばいいだけだ。絶対に殺す……例え我が身が滅したとしても……引き換えに貴様だけは絶対に殺す」

「あら……？ あなたもしかして……ノエルちゃんも救おうとしてるの？ こんなに不利な状況で？ あつはつはつ!! だからなるべく傷を付けない様にしていたのね。心臓だけを抉り取るなんてスマートに過ぎたもの」

ミリアは諦めていなかつた。悪魔に唆されて墮落させられ、今や魂が残つてゐるかも定かではないかつての同僚。そんな事で悩んでいるなんて知らなかつた。せめて相談してくれれば……いや、まだ遅くは無いのだ。ノエルの魂も肉体もそこにある。であれば、なんとかなる筈だ。私は唯一神ファルreas様の聖女。【聖十姉妹】^{テン・シスター}の第二席次、ノエルの姉なのだから。ミリアはそう己の心に言い聞かせて、ニヤリと口角を歪ませあげて立ち上がつた。

「黙れクソ虫。貴様は殺す。ノエルは救う。どちらも簡単な事だ。私は唯一神ファルreas様に仕える神罰聖女第二席。異端者を狩り、クソに集まる悪魔を滅ぼす者。怯え震えろ……哀れる魂……その魂魄、極彩に碎き散らしてくれよう」

「またお得意の強がり？ 聖職者つて皆そうよね。大言壯語で見栄つ張り。いい加減飽きてきたし、そのザコ悪魔ともどもさつくり殺してあげるわ」

魔人ノエルは長刀を漆黒の鞘に納刀し、腰だめに構えたまま敵手を見つめた。

純白のローブを血に塗れさせ、眼帯は切り裂かれて虚ろな瞳を晒している。何度も致命傷を負い、その度に回復法術で癒しているせいで法力は残り僅か、契約した悪魔の憑依術式も切れかかっている。正に満身創痍と言つても過言ではない。

だが、それでもなお聖女は美しく、高潔であつた。

言葉とは裏腹に、魔人ノエルの心にはさざ波の様な微かな揺らぎが生まれていた。悪魔にとつては慣れ親しんだ感情、だがけして感じてはならぬ感情、それは悪魔にとつて与えるモノではあつても与えられるモノでは無かつた。

不屈の闘志で何度も立ち上がる敵手に抱いたそれは——恐怖だつた。

「ノエルっ!! 神罰聖女第七席次ノエル・グシオンっ!! まだそこにあるのなら矜持を見せよ! 例え信仰を捨てようとも、貴様には叶えたい望みがあつたのだろう! ならば足掻けえつ!!」

「戯言を…………ぐうつ……嘘……たかが言葉ごときで……」

魔人ノエルの微小な心の揺らぎ。されど悪魔が恐怖するというあつてはならぬ事態に、畳みかける様にミリアの叫びが礼拝堂に木霊する。聖女ノエルを封印していた悪魔の術式が、恐怖によつて僅かに緩み、ミリアの呼びかけが微かではあれど届いたのだ。生まれたのはほんのわずかな隙。内側から抗するノエルの意思を抑えつける為のほ

んの僅かな時間。だがミリアにはそれで十分だつた。

ゆらりと、搔き消える様に残像を残して消えたミリアが、貫手を翳して魔人ノエルの目の前に現れた。

「そして貴様が憑依の核にした場所もわかつたぞ。ノエルの願いそのもの。墮落のきつかけとなつたもつとも大切なモノ——」

「人間如きがあああああッ!!」

——ぞぶり。

ミリアの纖手が、魔人ノエルの下腹部に抉り込まれる。皮膚と肉を裂き、生命の振り籠となる分厚い筋肉に包まれた器官に五指が食い込み、まるで胎児の様に内部で丸まつていた悪魔の靈核を法力を帶びた掌が包み込んだ——刹那。

「ごめんミリア！　もう限界！」

ミリアの肉体から【聖戦】の加護が失われ、同時に弾かれるようにテ스타の憑依が解ける。

「せめて貴様も道連れにしてくれる！」

靈核を碎くのは言うほど容易い事ではない。物質界と半ば重なる様に存在する異界とのはざまに存在する悪魔の靈核を破壊するには、それなりの法力が必要なのだ。素の状態のミリアでも碎く事は可能だ。だが、確実に一秒は掛かる。それは、魔人ノ

エルがミリアの首を斬り飛ばすには十分な時間だった。

——ヒュパツ！

ノエルの子宮に憑依した魔核を握り潰した瞬間、見えぬミリアの首すじに冷たい鋼の感触が触れた。

ああ、己もここまでか。だが、妹を救つて死ぬのなら、まあ悪くはない。

神の御許に召される覚悟を決めたミリアの耳に、悪魔の断末魔の叫びが届く。いつのまにか首筋に感じた冷たい感触は消えていた。

「ミリ……ア……」

使い魔の呻きにも似た呼びかけに、我に返つたミリア。その超感覚が周囲を走査し、彼女は悟つた。

「このクソ虫が……なぜ私を庇つた」

「えへへ……ボクは悪魔だけど、封印される前の事はあんまり覚えてないし……それにミリアと一緒にいるのは……楽しかったから……」

ミリアを庇い、魔人ノエルの一閃を受けたテスタ。胸部から横一文字に靈核ごと両断されて転がっている彼の上半身は、何かを掴むかのように震える両腕を空に彷徨わせていた。

「ごぶつ……だから……ミリアが死ぬのは嫌で……げほつ……あのね……君はきっと嫌

がるし……怒ると思うけど……言いたかつた事が……」ぼつ

「もう喋るな。いま修復してやる」

胸元から口ザリオを取り出し、靈核補修術式を起動させようとするミリア。

「そんな法力なんて……残ってないでしょ……げぶつ……あのね……ボクはきつと……君に恋——」

「おいクソ虫！ 使い魔の癖に勝手に死ぬんじゃあない！ おいつ！ クソ……ちく
しょう……テスタアアアアアアアツ！」

虚空を彷徨っていたテスタの両腕が、力を失つてだらりと下がる。破壊された靈核から急速に魂魄が霧散し、テスタと言う悪魔を構築していた要素が還元されていく。悪魔に滅びは無い。例え死のうとも、その魂は異界へと還り、また生まれてくる。以前の記憶を持たぬ、新たな悪魔が——。

ミリアはテスタという悪魔が嫌いではなかつた。

聖堂の封印施設で記憶を消され、使い魔として調整を受けた悪魔たちの中で一つだけ気に入つた悪魔に名を付け、己が使い魔とした。気に入つた理由はわからない。ただ、どこか寂し気なその魂が、何故だか己と似ている様だったかもしれない。

共に過ごすうちに能天氣で捨くれたテスタを眺めていると、渴いた心が満たされる様な気がしていた。鬱陶しいと思う事も多かつたが、そうやつて感情を動かされる事すら

も心地よかつた。

悪魔に家族や村の人達、そしてひそかに心を寄せていた兄の様な幼馴染を奪われた時、ミリアは絶望の中で神の声を聞いた。そして、凄惨な光景を焼きつけた己が両の瞳を捧げたのだ。

全てを奪つた悪魔が憎かつた。だが、聖女として活動を続けるうちに、己の村を襲つた悪魔に指示を出した者が人間だつた事に気付いた。それからミリアは、悪魔ではなく悪に染まつた人間を憎む様になつたのだ。

「駄目だ。お前が死ぬ事を許さない——唯一神ファルレアス様……お許しください」

ロザリオを握りしめたまま神に許しを乞うと、ミリアはテスタの上半身を抱き起こして己が顔を安らかな彼の死に顔に近付けていく。

「我が魂の一部をもつて汝と再び契約を結ばん——【テスタメント聖魔契約】」

血に塗れた互いの唇がゆつくりと重なり合い、術式に従つてミリアの魂の一部がテスターの欠けた靈核を補つていく。

「んつ……んうつ……ンつ……」

血と唾液の交じり合つた背徳のくちづけ。どこか淫靡めいて、だが莊厳もあるその光景はまるで、一つの宗教画の様に美しかつた。

「ふはつ……。ふふ、私の初めてを捧げたのだ。早く起きねばお仕置きだぞ——テスタ

!!

「はえっ!? 今ミリアがテスタつて……あれ? ボク死んだよね? ていうか今ボク、キスされてなかつた?」

己が名を呼ぶ主の声に驚いて目を覚ましたテスタ。靈核の補修に伴い、両断された肉体もすでに元通りになつてゐる。

「氣のせいだクソ虫。そんなわけがあるか」

「えー……でもなんか前よりもミリアと近い感覚があるんだけど……もしかして魂—」

「氣のせいだクソ虫!! 理解したらさつさと起きろ。ノエルを癒して帰投するぞ」

「アッハイ。了解ですマイマスター」

「よろしい」

こうして、聖女ミリアとノエルの任務は幕を閉じた。

聖女ノエルは墮落の代償として神罰聖女の任を解かれたが、ミリアの口添えもあつて過大な罰が下されることは無かつた。そもそも唯一神ファルレアスはそこまで狭量な神格ではないのだ。たとえ墮落しようとも神の奇跡は変わらずに行使できる事がその証左であつた。勿論聖女としての超的な肉体能力はもはや無い。だが、想い人と幸せそうに暮らし始めたノエルの事を咎める者は教会内部には誰一人としていなかつた。

そして、より深く魂という絆で結びついたミリアとテスタはと言えば——。

「ワインが切れたぞ。さつさと地下蔵から取つてこいクソ虫」

「はいはい、おつまみにアグレイラ産のチーズと全裸の美少年はどう?」

「チーズはもらう、だが偽の美少年はいらん。天然モノを持つてこい」

「もう……ベッドの中ではあんなに素直なのに——ピギヤアアアアア!!」

「うるさい！ 黙らないと殺すぞクソ虫があつ!!」

ロザリオを握りしめてお仕置きをしつつ、憤怒の声で眼帯の聖女が吠えた。悪魔の言葉を否定せぬままに——。